

# オレたちの村を創ろう

■弥<sup>さか</sup>栄<sup>の</sup>之<sup>と</sup>郷<sup>の</sup>共同体日記

●島根県那賀郡弥栄村大字三里は-38

オレたちの村を作ろうと宣言する。世界のどこを捜してもないような村を。他者に雇われるのもういやだ。他者のために働くのはもういやだ。金もうけのためにだけ働くのはもういやだ。いやなことはいやだと言え、世界を作ろうと宣言する。

日本のどこを捜してもない世界を。ほんものの空の下でほんものの空気を吸ってほんものの労働をする。ほんものの社会を作ろうと宣言する。国家のいらぬ社会をオレたちのことは

オレたちでやっていく社会を役人も、警察官も、商人もいない社会をオレたちは本気で作ろうとしている。忘れかけているオレたちの、

オレたちの村を作ろうと宣言する。オレたちがオレたちであるためにオレたちがオレたちをとり戻すために

8月1日 きょうの最大の問題は、何といつても『週刊新潮』の記者の件である。彼の取材にきた目的は、彼のことで言え

たちの訪問は、われわれにとって久し振りに若い女性の顔を見ての暇つぶしにはなったが、はつきり言ってくだらないのだ。

8月6日 ある意味では、君たちがつらい数ヶ月をすごした備北の地を去らなければならなかったことを、ぼくはよろこんでいる。ここはすばらしいところだ。ぼくは、ここを我が家のように感じる。ここには、一人の所有者もなく、すべての者に属している。

日本においてぼくが訪れたコミュニオンのなかで、ここは最高だった。

ぼくは、いつの日か君たちの精神が実を結ぶことを信じ、そのことを希望している。そしていつまでも、ぼくはこの場所のことを忘れないだろう。(ベン・エリクソン)

8月7日 今日は早く起きたのです。だから早く食事ができたのです。ベンは、ここを出ていったのです。暑いので仕事はきつかったのです。ヒゲとドジョウと私めは、草刈り機で草刈りをしたのです。三人ですと能率的なのです。今日の最大の出来事は、耕運機が入ったことなのです。八万五千円也なのです。また借金が増えたのです。夜はミーティングをして、作付計画やら、経営のことやらを話し合ったのです。

8月9日 夜八時頃、村会議員の広瀬さんや部落の自治会長の北山さんら五名が話し合いにみえる。具体的な話の一つとしては「ヤマメを飼わないか」ということらしい。ヤマメを飼って、放流して、釣り人を呼ぶか、広島に持って行って売るかを決まっていらないらしいが、村の産業開発、観光開発として本気で考えているらしい。現実にヤマメを村費で実験的に繁殖しているらしい。どうも乗れない話だ。

酒やカンヅメ、キュウリのスモミなども持参してきてくださったので、久し振りのアルコールで陽気にいろいろ話し合いました。

共同体が真に孤立性・閉鎖性を打破するためには、村の中に溶け込まなければならぬと思う。本来ならばぼくたちの方から、村にどんでん入っていくべきなのだ。共同体志願者だけに開放された共同体なんて意味がないし、変革力を持たない。

8月12日、15日 「備北共同体運動のこの当面の方針を出すキャンプ」参加者一〇名やけど、少数精鋭なのだ。

一日目 ①経過報告(備北から弥栄への過程) ②百人委に寄せられている批判にどう応えるか。

ば「数人の若者(それも外人を加えた)が、たんなる流行の脱都会志向としてではなく、集まって何かをしようとしているのに興味を覚えた。〈外人の目を通して〉という形で、その日本の若者のラジカルな行動を自分のカメラで表現してみたい」ということらしい。今までここに取材にきた新聞記者のように、たんなるニュース・ソースとしてぼくたちの行動をとらえているのではないという点で、彼自身の目的意識も感じられ、記者を交えて取材に応じるかどうかについて話し合う。

①被写体になることに対する拒否反応。  
②その写真が週刊誌という方法で発表されることとの限界とその波紋に対する危惧。

③「外人の目を通して」というが結局はカメラマンの演出にすぎない。  
等々の問題がだされたが、結論的には、そのカメラマンの問題意識・表現力を信じて、条件付きで応じることにする。

8月3日 社過ぎ三人の女学生さんが来る。東京からだそうだ。過疎問題を家政学の卒論にするとかで、当地の「ものめずらしい若者」と話すためにわざわざイビられに来る。十分な知識(準備)もなく、何よりも「何のために……」という目的意識もたないお嬢さん

二日目 ④農業機械(耕運機、草刈り機、フォーク)の使い方の講習。女性も含めて全員がこれらを使えるようになるということは、共同体運動にとって非常に思想的な行為なのだ。⑤自主流通機構の確立のために、広島での販売とその運動の展開のために。⑥レクチャー「日本農業の破壊状況と労働者・農民連合への展望について」(鉄治)、「共同体と教育問題」(はじめ)の二つ。

これ以上は詳しく書いてやらないのだ。詳しく知りたい人は、備北百人委員会宛「備北だより」を申し込まれたし。

三日目 今秋より来春にかけての農業計画の話、出稼ぎの問題、借金の問題、頭が痛いですね。今までのところ、土地関係のものをぬいても、約三五万円の借金です。備北から弥栄へ移ったことと関係する特別の出費は、そのうち二、三万円。畑仕事もまる一年分遅れてしまった感じ。正月キャンプの計画を大幅に修正しなければなりません。

今日はちょうどお盆です。盆踊りがあるのです。われわれはニワトリを一羽殺して、盛大な酒宴を開いたのです。ビールもあるのです。それから盆踊りの会場に大挙して押しかけたのです。急に踊りの輪は大きくなり、に

ぎやかになりました。吟は、中年のオバチャンにつかまって何やら話して入っています。はじめは道路に座り込んで、岡本さんと焼酎を呑みはじめました。弓子はスイカを食べています。私はかわいい女の子を膝のうえに乗せてまだビールをのんでいます。他の者はみんな踊っています。はじめは、犬を抱いて踊りの輪の中で寝込んでしまいました。

8月15日 今日、昨日の約束で岡本さんと今谷さんが昼からビールに酒を持参のみにくる。果実酒を作る話やら、タケノコのカンヅメの話やら、なんやかんやよかったです。八時頃になって、急に岡本さんとこへ行くことに話が決まり、みんな千鳥足でゾロゾロ三〇分ほど歩いていく。途中、危機一発のところでもマムシをみつけ、つかまえる。さつそく焼酎のビンに入れてマムシ焼酎。それにしてもミツコさん（奥さん）の手料理はおいしかったのだ。帰途、かなり酔っぱらって、インターナショナルから山谷ブルースまでの大合唱。

8月17日 個人的な心情を告白する。寂寥とした心痛が激しい／せつなくてせつなくてどうしようもない／彼女といっしょに生活できないのは辛い／この山里には恋するものがない

ることが公式に認められたことであり、まったく当然なのであります。共同体運動のへ健全さの証しであります。

9月3日 いよいよ明日帰ります。弥栄之郷共同体にきてもう一〇日以上になります。なぜ一〇日もいたかという、一〇日以上いると食費が安くなると（やどぢやう）に書いてあるからです。（やどぢやう）は（宿帳）を古典的にならしたものではありません、（宿ぢやう）すなわち「ここは宿ではありませんよ」という意味らしいです。しかし本当は宿帳のような機能も果たして、訪問者はまず自己紹介のようなものをこのノートに書きなればならないことになっています。そこに（例外のある原則）として、食費については連れ込みホテルの宿泊値段表のようなものが書かれています。

その他にも、「訪問者は常駐者と同じように労働し、料理し、掃除すること」とか「訪問者はすべてに自発的であり、積極的であり、弥栄共同体を担うこと」とか書いてあります。さて、最後にこの共同体での生活と学習と労働と闘争の総括的なものを書きたいんですが、まだケリがついてないんです。ここで学んだこと、考えたことは、もしかしたらこれ

い／孤独と絶望だけを道づれにして歩かねばならない／多くの人間が歩かねば道はできないのか／それともぼくのあとにも道はできるのか／なにかもすべて消滅してしまえ！

8月18日 畑仕事は楽じゃない。お百姓さんごころうさんと行ってあげたい気がします。大阪の都会っ子が、農業労働のつらさを味わうというのはとても有意義なことじゃないかな。国会議員もちよつとぐらいいやってみて、身をもってつらさを知るべきだと思うな。でも汗水流して、手にママ作って溝掘りをする。その溝に水が流れたときの感激は、それまでの疲れを吹き飛ばす清涼剤。

8月19日 「タイヘンヤー！」  
「どうしたんや」  
「ニワトリ小屋でニワトリが卵産んどるやんか」  
「エッ、ホンマか、そら、タイヘンヤー」  
というのが、はじめてニワトリが卵を産んだ日の話。ニワトリだから卵産むのは当然なのに、あまりの感激、あまりの意外！

8月20日 ここへ来て四日目。ここへ来るまでの生活はあまりにも単調で、ぼく自身「何かしよう」と思っていたのだが、何も十分なことのできなかった。ここへ来てぼくが得た

から一生つきあわなければならぬ問題ではないかと思えます。この共同体が強力な完成されたものではなく、まさにぶっ倒れそうになりながら、ヨレヨレしながら歩いてきたということ、このことに魅力を感じ、このことに可能性を感じ、このことに親しきを持ちました。

9月4日 今夜は、週一回の定例ミーティングの日。今のところ弥栄共同体では週一回の総括ミーティング、週一回の合同学習会、それに週一回近所の人との話し合いを実行することになっている。今日の話し合いはかなりエエ線までいきました。

「いったい俺たちは何者やねん」  
「百姓か？」  
「ちやうやろ」

「百姓になりたいからここへ来たんか？」  
「そんなアホな……」  
「闘争の場を選んだら、それがたまたま農業やっただけや」  
「ほんならなんでも良かったんか？」

「まあ、そうとちやうか」  
「俺は自分では（職業転々主義者）やと思ってるねん。今までも学校でてからいろんな仕事やってきたから、今は百姓してるけど、一

ことは「一人でも生きる」ということである。今までの自分とガラリと変わった感じがする。ここでもうひとつやりたいことは、「何かをする目的をもつ」ということである。都会に帰っても生活が単調にならないような目的をもつことである。大阪の一少年Kが書いたのだ。

8月27日 風呂場のそばで卵を四個発見した。今のところ鶏は放し飼いの同然のため、どこに産んでいるか判らないので困る。鶏舎を完全に、鶏が逃げ出さないようにして、一定の場所を卵を産むようにしなければならぬ。  
9月2日 今朝も早くから、ポリさんたちがマイクロボスで共同体見物に來られました。マイクロボスのなかには二人しかいないので不思議に思ってたあたりを見回すと、道端にある小屋の陰に二人、畑が見下ろせるヤブの中に二人が隠れてこちらをうかがっていました。「頭隠して尻隠さず」のポリさんたちを障子の破れ目から見物していると、なんと警察官が立ち小便をしているではありませんか。「イヌのみ小便するべからず」の立看板を立てようかとみんなで話し合いました。

警察が共同体に関心を示すということは、正當にもその共同体が反体制志向を持っている

生百姓しようなんて思てへん」  
「要するにやな、エエカッコして言うたら（社会的身分の拒否者）ちやうことかな」  
「ルン・プロやろか？」

「意識的にも、階級的にも、今の位相に至った過程からいうても、ルン・プロともちよつと違うんちやうか」  
「しやけどな、俺たちのそんな意識は生活派の連中から「不謹慎や」とか「あいつら本気で革命する気なんかいな」で批判されるで」  
「もう批判されとるやないか」

「俺は最低、現代の小市民社会の役割構造から飛び出した奴でない信用でけへんなあ。学校の先生してて「現代の教育問題は……」と言つても、みんなウソみたいに聞こえるわ」  
「社会的身分に対する自己否定がないとあかんちやうことか？」  
「俺は（職業転々主義者）として、どんなこととしてでも食うていけるという自信と経験がある。そやから「食うこと」「食うために」を金科玉条のごとくにしとる双等は信用でけへん」

「ルン・プロや職業転々主義者に生活や日常性がないように言われているのには腹が立つ

なあ

「現代人にとつて『これしかない』と云うてしがみついているような仕事であるんやろか」

「日常、日常言つて闘争の生活や共同体の生活を非日常のように言うのはおかしいぞ」

「それよりもやなあ、今の自分の生活と仕事と意識をそのまま継続して持ち続けることを日常のように思われているのがおかしいんや」

「日常というのは、異常の連続ちやうか。点がつながれて線ができるんやから、日常なんてはじめからあるもんちやうがな。どんな風にメシを食つても、どんなところで闘つても、そこを日常にし、その闘いを日常にするしたたかさが必要なんちやうか」

「光栄ある、職業転々主義者」て言い直さなあかんなあ

「せやけど、生活派」なんて存在するんかいな」

「俺たちものすごい生活派」やと思つけどなあ。学生が外から来たら、まず口をそろえてここの生活主義を批判しよるがな」

「それは今までの闘争拠点があまりにも生活と無縁でありすぎたことによるんちやうかな」

「生活を守る闘争というのがおかしいように、  
④農業記録のようなものを日記とは別に作ろう。例えば、いつ何を植えたか、何の間引きをしたか等々が来年になつても判るように。またこれは、(固定的常駐者)を廃し、(部分的かつ流動的常駐者)に移るためにも、簡単に伝達できる技術——アマチュアにもできる技術を作り伝えていくことが必要なのです。

9月15日 鉄治は四国へミカンの直売の件を相談するために出かけました。広島でのミカンの直売は、備北百人委の今冬のハイライトであり、また今後の広島での消費者運動の可能性もかかっています。

鉄治と入れ替りに、竜次の妹たちが連休を利用してやってきたのと、はじめが東京から帰ってきたのと、久し振りににぎやかになり、料理の上手な女の子の登場で食生活も豊かになりました。

9月21日 7月からここで生活している。なるべく責任を持たずに、逃げながらここで生活してきた。集団との一体化を自分自身から拒否してきた。俺たちに(共犯)は成立しなかったのは明らかである。犯しきれないから。互いを、そして多くの他人を。自分

闘争したら壊れるような生活は、生活て呼ばれへんのんちやうか」

「闘うことを生活化し、日常化してしまふことが必要やねん。冗談やなくてこれしかあらへんのやで」

9月8日 本日、卵を一三個発見。今までの最高であります。この共同体では卵は(発見)するものであつて(収穫)するものではないのです。なぜなら、ニワトリちゃんが鶏舎から自由に飛び出して一日を過ごしているためどこに産んでいるか分らないのです。毎日「宝探し」ならぬ「卵探し」を楽しんでいます。本日の分も、八個だけが産卵箱の中に産んであつて、あとの五個は鶏舎の外で発見しました。しかし、一〇個前後というのは、売るには少なすぎるし、食べるには多すぎるという中途半端な数で困ります。

シイタケもそろそろ収穫しようというので二日ずつ水に浸すことをはじめました。

9月12日 今日は卵が二〇個です。昼間一十九個を発見して、二〇個目はまだかまだか何度も産卵箱をのぞきこんだり、鶏舎の回りを捜したりしましたがありません。それが夜になつて遂に発見したのです。どこだったと思えます? 何と勉強部屋の机の下にあつたんばかりを犯している。(共犯)は幻想としてすら生じていないのではないか。個人になつた時、闘いが終わることを俺たちは体験した。個人から共同体への志向の根底には、この体験が重たくのしかかっている。

9月26日 今冬の過ごし方について相談する。鉄治は広島へ季節工として出ること、竜次は大阪で塾教師を再開することが決まっている(もつとも鉄治の就職は難行している。大学卒が障害となつているのだ)吟とはじめが交互に共同体に残り交互に大阪へ出稼ぎに行く。共同体は一応9月でスジを引くことにする。もうあと数日。仕事は山のように残っている。今冬は共同体に残るものも気楽に留守番しているようなわけにはいかないだろう。

正月の備北百人委員会の集会を大阪で開き、その時全員が再会することになつて。来年の仕事は三月のシイタケからである。もちろん来年は、弥栄之郷共同体にとつて波乱万丈の闘争の年になるだろう。状況を切り拓く動きを、ここから作りださねばならぬ。

右のような事情で、弥栄之郷共同体も一〇月からは長い冬ごもりの時期、明日のために

です。家の中まで入つて産んでいるとは知りませんでした。それにしても、われわれ人間を馬鹿にしとるんではないでしょうか。

先日、家の前の道路わきに、黒鉄ヒロシの漫画と「卵売ります」の看板を画いた効果がありました。ぼちぼち買いに来る人がいます。今日も、浜田から冷凍トラックで魚を行商に来る兄ちゃんに卵を売りました。その代りに魚を買わされて、結局、物々交換のようになってしまいました。卵が小さいので、まだ一個八円です。卵が小さいからといって心配することはありません。大きくても小さくても一個は一個だという感覚があるのと、ナスビやキュウリの小物が流行っているように、卵も小さくてもけっこう売れます。

9月13日 ①できるだけ仕事をみんで固まつてやることにしよう。一人があつち、一人がこつちでは、共同労働の楽しさもなくなる。②もつとみんで、作付けその他についてもワイワイガガヤ相談して決めることを習慣づけよう。分担責任というのが仮にあつたとしても、一人が決めてみんがそれに従うようでは、共同体的なやり方とはいえない。③すべての仕事に關してもつと計画的たろう。特に今何の仕事がもつとも必要とされている

はいつくばつて耐える時期になりました。よつて日記抄も一応ここで筆をおくことになりました。おそらく来年の三月、また違った形です。新たにここに弥栄之郷共同体の悲しみ・喜びの諸々を紹介していくことになるでしょう。

今、弥栄之郷共同体には四人の仲間と七〇羽のニワトリが居住し、野菜作りやシイタケ栽培にとりかかっています。誰もが自由にやつてきて、自由に耕すのを待っています。弥栄之郷共同体は、まだわずかばかりの狭い土地ですが、そこを私たちの願いと理想をこめた最初の土地にしたいと考えています。だれのものでもない、みんなのものであるような土地にしたいと考えています。そこで、この土地をみんで、できるだけ大勢で共有することを提案します。

一口二千元、約三〇坪相当ずつを単位として共有することによつて、今の社会の土地の私有制度から自由な、解放された、社会化された土地にすることを提案します。

大阪市東成区玉津二丁目 東成玉津郵便局 留 備北百人委員会 までお手紙下さい。





## キブツ研修生家族会報告

去る十月一日午後一時、代々木オリンピック記念青少年総合センターに於て、第九回キブツ研修生家族会を開催した。出席者は四十四名、例により手塚理事から中東状勢やキブツ研修生の近況等について左記のような話があり、質疑応答が繰返されたのち、各グループに別かれて連絡懇談会に入り、午後五時散会した。手塚常務理事の挨拶概要。中東紛争が毎日の新聞雑誌に伝えられており、皆さんは何よりその事が気がかりであろうと存じますので、まずそのことからお話しします。昨日配達され

た現地のキブツ研修生世話係、奥村久雄氏からの書面を持ってまいりましたが、その内容はミュンヘン事件や、ロンドン事件等外部ではアラブゲリラのテロ事件が相次いで伝えられているが、イスラエル国内は秩序が確立されており、ゲリラ活動の余地がない関係もあって、去る五月末のロッド空港事件後は不穏な行動はどこにもありません。日本の研修生一同も無事安泰でありますから父兄の方々も安心して頂きたいと書いてあります。私は常に申し上げておりますように、危険と思えばキブツ研修生を送りません。また状勢の変化で中東危機が切迫する予感があれば、現地滞在中の研修生でも直ちに引上げます。だが今はそんな危機感はありません。新聞紙上でみると如何にも戦時下にもあるように誤解され易いのであるが、アラブ側のゲリラ部隊というのは、日本の赤軍派などと同じような無頼漢であつて彼等の暴挙と国際紛争と混同すべきものではない。いまイスラエルとアラブ各国とは戦争再開の状態にはありません。相互に面目を保つ方法で和平の糸口を求めつつあるのが本旨であらう。問題はむしろ大國間の野心をどう氷解するかにあらうと存じます。

一九六七年六月五日勃発した、あの六日戦争ではイスラエル軍は本土の二倍以上の広大な地域を占領し、いまもそのまま統治しているが、その占領地域に住む百五十万人のアラブ人は、イスラエル政府の善政によりかえつて生活が安定して治安の秩序も確立しているそうです。また占領地域のアラブ人は誰でもイスラエル国内と自由に行動できるし、土木工事など大半はアラブ人の労働者が働いており、それで何の支障もなく平静が保たれております。問題のガザ地区の難民四十万人などもイスラエル政府の苦心の政策が功を奏して産業に従事するようになり、流石の危険地帯も殆んど平和境に変わりつつあるそうです。従つて、日本のキブツ研修生諸君は当方から中東危機の心配を注意してやると不思議がつております。

からず御了承願います。私はこの際、特に父兄の皆様一言申し上げたいのは、時代の変化とキブツ研修生のことであります。日本の保守党政府である田中内閣が、中国と握手せざるを得ない世界の動向を重視する必要があります。大半の日本人、特に政財界人は中国大陸との経済交流に大きく期待しておりますが、勿論それは結構であり確かに期待以上の期待が寄せられましようが、同時に奔流の如く押しよせる思想の怒濤は日本社会を一変せしむる力圧が、世紀の力となつて影響するであります。なんと云つても中国の人民公社の在り方は、歴史の新しい方向を強く示唆するものであり、今の日本の社会体制そのままでは、対抗できるものではありませんが、イスラエル国に発達したキブツ協同社会は資本主義経済の中で、その長所を生かしながら、その欠点を是正して成長し既に六十年の歴史を重ねて試練済みであるだけに、日本社会に受け入れ易く、且つ現体制との摩擦も少なく、そして人民公社の長短補足にも役立つものと存じます。その意味に於て皆さんの子弟が、キブツ思想に共鳴し研修生として体験しつつ研修していることは、最も有意義なものであります。

### 新 著 紹 介

志村 武 著  
シオニズム

ユダヤ教と仏教  
評者・手塚信吉

イスラエルとアラブ諸國とは、なぜ争わなければならぬか。その歴史的、宗教的、人種的諸要因を解明して、興味深く解り易く書いてあり、一晩で読了理解のできる本と云えば、この「シオニズム」だけである。著者の近著には「青春の発見」「ユダヤ人」等ユダヤ民族に関係のあるものがつぎつぎに発表されているが、そのいずれも難解な旧約聖書の古文書を近代風に解釈して、品性を崩さず真隨を求めずそして恋あり愛あり風刺ありで、誰が読んでも面白く魂の糧ともなる名著である。

著者は聖書文学の造詣が深く、ユダヤ民族史の研究でも第一人者であるが、東洋哲学、特に仏教哲学に深味があり、ユダヤ教と仏教との比較対照にも著者独特の見識があり見解があり、ユダヤ人を理解する上に欠くことのできなない良書である。

テルアビブ空港乱射事件が、バレスチナ

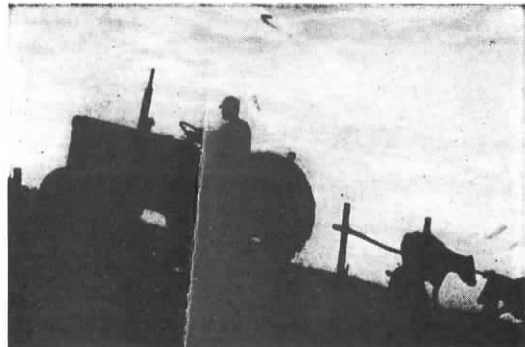
ゲリラに雇われた日本人青年三人の暴挙であつたことから、日本人にも身近な問題となつており、その中東紛争の当事国を知る上にも本書の一読を勧めたい。イスラエル國は平和面に於ても世界的に有名なキブツ協同体社会があり、各國から年々数千人の研修生や視察者が訪れている。日本からも当協会の主催で既に八年前から毎年数十名のキブツ研修生をイスラエル國に送つているが、これらの研修生はまず何よりも、キブツの母体であるイスラエル共和国そのものを正しく理解し納得の上でキブツに行く必要があるが、シオニズムを理解せずしてイスラエル共和国を理解することはできない。そのイスラエルを理解せずしてキブツに行つても無駄と云うことになる。

それはキブツがユダヤ人の母國再建の血涙の結晶だからである。自由平等無差別、搾取も不勞所得もなく、各自がその能力に応じて働き必要に応じて分配を受ける協同一体社会の真隨を知るためには、正しいイスラエルを理解する必要がある。本書はその手引書として推奨したい。

新しい農村指導者の雑誌

# 地上

B5判 ● 定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役職員、農業経営者は

## 全員読もう

正確な情報 / 正しい分析による

## 重点特集

● 3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

### 制作部メモ

▼現在の事務所に移って、朝夕にこと自宅の間を明治神宮や代々木公園の森を歩いて通う生活も一年になります。四季おりりの森の表情に安らぎを感じ、その美しさを堪能しました。でも、都会の緑は優しすぎるようです。自然の中で生きたい。と私たちはよく言いますが、その「自然」とは、人間の勝手な都合で作りがえられた自然のイメージをどれだけのりこえていくのでしょうか。

大都会に長いこと生活していると、自然の「優しさ」には気づいても、その「厳しさ」にはうとくなるようです。 恭子

▼先日、日本人の手によるはじめての「非暴力セミナー」に参加した。権力の横暴に対して「向こうの土俵」の中で反発し対

立することもいいのだが、それ以上に「自分たちの土俵」をつくってそこで力をつくしてみることの大切さを感じた。また、暴力・非暴力という判断軸にもうひとつしっくりしないものを感じ、むしろ自然(人間的)・不自然という軸の方が自分にはピッタリするようだった。そして、「自発(自立)」ということの深い意味を再びかみしめざるをえなかった。 哲

▼教育勅語や軍人勅語を引っ張り出して暗誦しようと思う。そして陛下が日本の親方であることを認識したい。自由学校なんてのどかなものより、士官養成学校を再興しよう。講師は横井氏をはじめとして位の低い元軍人がいい。エライ人たちは変節漢だから嫌いだ。 グラム島から帰って横井氏は天皇陛下に会いたいといった。その願いはかなえられず、彼は

遙拝するにとどまった。「はづかしながら……」文句言わずに死に、耐え難きを耐える人になりました。 ヒコ

▼口に出ることはがいに美しくとも、行動がそれと裏腹な人間は信用ができない。ほく自身も又、語ることはと行動とのあいだに大きな矛盾のある人間の一人である。特に編集という仕

事をしていると、新しい思想や生き方に触れて感動することはあっても、ひとつのことを消化しきれないうちにちがう新しいものにもわかっていかなければならなくなる。自分がますます観念的になっていくような脅威を感じるが、行動による表現を試みるためには、次にくる大きな転換のときを待たなければならぬのかもしれない。 允士

#### ■直接購読(入会)のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者(キブツ会会員)によって支えられています。1年間(12号)の会費は入会金(200円)とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

#### ■月刊キブツ取扱書店

東京=新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、神田書泉、ブックマート、書泉グランデ、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店、銀座大雅堂 京都=京都書院 札幌=富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台=八重州書房 盛岡=第一書房 名古屋=おばた文庫 松本=遠兵ブックセンター

■印刷所=創土社 東京都港区芝5-16-13 電話 455-2421(代表)

「月刊キブツ」 1972年11、12月号(通巻104号)

頒価 150円 送料16円(1年間2,000円)

東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイツ10号 日本協同体協会

電話 370-2813 振替・東京 24403